

川崎市市民ミュージアムの文化財救援活動への参加

神奈川県立金沢文庫 梅沢 恵

救援活動参加の経緯

令和元年（2019）10月29日付けで神奈川県博物館協会（以下、県博協）から加盟館園に救援活動への参加要請があった。神奈川県立金沢文庫では、救援活動への参加は個々の意志に任され、現在までに学芸員4名が参加している。一部に公務出張となるか懸念する声があったため、神奈川県立の博物館施設4館（金沢文庫、歴史博物館、生命の星・地球博物館、近代美術館）に対し、本課（生涯学習課）から支援協力依頼が文書で発出された。

防護服や長靴、簡易な防塵マスク、ヘルメットなど基本的な装備は川崎市市民ミュージアムと県博協から提供されるということであったが、先行して現場に入っていた神奈川県立歴史博物館から高機能防塵マスク（DSⅡ型、RSⅡ型以上）の着用を勧められた。高機能防塵マスクは所属で購入し、ゴーグルとヘッドライトを自費で購入して参加に備えた。

救援活動への参加

11月から国立文化財機構をはじめさまざまな支援団体による支援活動が始まっていた。各組織団体により救援する分野の棲み分けが行われ、県博協では考古、歴史、民俗資料に参加することが決められていた。県博協の支援活動が本格化した1月14～17日まで4日間におよび国立民族学博物館の日高真吾氏による民俗資料の洗浄のレクチャーが実施されたが、所属の業務の都合により参加することができなかった。

はじめて参加したのは1月23日であった。当日は、はじめに1階の吹き抜けのホールに集合し、川崎市市民ミュージアムの学芸員から作業内容の説明を受けたのち、考古、歴史、民俗の収蔵庫ごとに分かれて作業にあたった。

収蔵庫3（歴史資料）

筆者は主に収蔵庫3のレスキュー作業に従事した。収蔵庫3は古文書を中心とする歴史資料の収蔵庫である。近世文書は家ごとに中性紙の文書箱

に収納され、収蔵棚に整然と配架されていたが、天井近くまで水位が上がり、多くの古文書が棚から流されていたという。

長い間水に漬かり、カビやバクテリアが発生している古文書の劣化を食い止めるために冷凍する作業に従事した。効率よく冷凍コンテナに積み上げるためにプラスチック製の折りたたみコンテナに詰め、台車で施設前広場に設置された冷凍コンテナに運び込む作業が続いた。

古文書はポリ袋に小分けにパッキングされていたが、水を吸ってずっしりと重い。カビやバクテリアにより緑色やピンク色に変色し、表面はヌルヌルとして強烈な異臭を放っていた。密閉度が高いゴーグルや防塵マスクを着けながらの作業は視界が狭く、息苦しく、肉体的にきつい重労働であったが、それにも増して、変わり果てた収蔵庫や文化財の深刻な状況を目の当たりにしてショックを受けた。

収蔵庫1（民俗資料）

しばらくして、収蔵庫3の古文書の冷凍コンテナへの搬出が完了したため、民俗資料が収蔵される収蔵庫1の作業に従事することになった。

民俗資料の洗浄作業の手順は、まず収蔵庫から資料を野外に搬出し、ハケなどを用いてカビを洗い流し、屋内に広げて乾燥させる。次に、乾燥した資料にエタノールを塗布し乾燥させるという工程である。陶磁器や農具などに比べ、漆器などは表面の漆が剥がれて取り扱いが困難な状態なものも多く見受けられた。

収蔵庫内の民俗資料は材質や形状、大きさなどが多岐にわたっていた。浸水で大きな筆筒が浮いて収蔵棚の上に乗っかると、水が引いた後に高所に残り残されて落下の危険があった。藁や木製の民具はカビの汚染が深刻で、色鮮やかなキノコが生えている資料もあった。陶磁器や桶などには汚水が溜まった状態が続き、他の収蔵庫の湿度が下がってからも、しばらく高湿な状態が続いていたのかもしれない。入庫するたびに収蔵庫の壁面の黒カビの範囲が広がっているのが確認された。

救援活動に参加して

令和元年度の救援活動には延べ9日間参加したが、令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により県博協の救援活動はしばらく休止された。また、その間、現場では、エタノールや防護服の入手が一時困難となる苦労があったという。

感染者数が少し収まった夏、7月15、16日に国立歴史民俗博物館の天野真志氏による古文書レスキューのワークショップが開催された。筆者は16日に参加し、昨年度に冷凍処理をしていた収蔵庫3の古文書を解凍して、調書や写真で記録をとりながら脱水、乾燥させる工程のレクチャーを受けた。複数の古文書が固着した状態の資料を解体する作業では、整理の封筒や薄葉紙が古文書に貼り付いているのを目にした。被災資料の冷凍、乾燥の技術を学ぶとともに、日ごろの博物館の資

料の保管方法についてもあらためて考えるよい機会となった。

新型コロナウイルス感染症が収束するまで、しばらく救援活動への参加は難しい状況にある。この間にも、川崎市市民ミュージアムでは作業が続けられている。一時の危機的な状況は脱したとはいえ、常に緊張を強いられながら長期間、現場で作業にあたっている市民ミュージアム職員の疲弊も心配である。状況をみながら今後も救援活動に協力していきたい。

（参考）

川崎市・川崎市市民ミュージアム編「令和元年東日本台風から1年—川崎市市民ミュージアム 被災収蔵品レスキュー活動の記録—」2020年
望月一樹「神奈川県博物館協会の防災対策とレスキュー活動」『博物館研究』628、2020年